＜実践事例＞

京都産業大学グローバルコモンズにおける英語ワークショップの事例報告

尾崎　良子[1]

学生の主体的な外国語学習および異文化理解に特化した学習空間「サギタリウス館グローバルコモンズ」は、平成28年4月のオープン以降、学習支援員（3名／任期付職員）および留学生を含む学生スタッフ（20名／有給アルバイト）による学習支援を提供している。具体的には、(1) スピーキング、リスニングを中心に英語を使う機会を与えると共に、異文化に触れ合うきっかけを与える体験型アクティビティの実施、(2) 大学での学びに必要である英語でのプレゼンテーションやライティングなどに関する基礎を学び、授業に役立つスタディ・スキルを習得するための体験型ワークショップの実施、(3) 英語学習方法や英語でのエッセイ、プレゼンテーションなどの課題に取り組む際に各学生が抱いている疑問や悩みを解決するためにアドバイスを行う1対1での個別英語学習支援[1)]を実施している。本稿では、平成28年度実施の英語ワークショップ参加学生に対するアンケートおよびヒアリング調査を通じて得られた学習支援ニーズと課題を報告する。

キーワード：正課外学習、スタディ・スキル、学習支援、英語ワークショップ、グローバルコモンズ

1. はじめに

大学設置基準（1956）によると、「大学における各授業科目の単位数を定めるに当たり、1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成すること」と定められている。大学における1回あたりの授業時間を90分とし、半期15回で1単位のクラスが設定されている場合、22.5時間の正課外学習が求められていることになる。しかしながら、文部科学省中央教育審議会（2012）によれば、「我が国の学生の学修時間（授業、授業関連の学修、卒論）はその約半日の1日4.6時間とのデータもある。これは例えばアメリカの大学生と比較しても短い。」との指摘がなされている。京都産業大学（以下、本学）の全学生を対象に実施された「学生生活実態調査」(2014) においても、授業がある期間の1週間における「授業・実験の課題、準備・復習」に費やす時間を尋ねたところ、回答763件中57%（N=435）が「5時間未満」と回答しており、本学学生の過半数を占めている。

本稿では、学生へのアンケートおよびヒアリング調査を通じて得られた正課外における学習支援ニーズとその課題について報告する。本稿の構成は以下の通りである。

第2章では、グローバルコモンズの概要としてグローバルコモンズ設置の背景とコンセプトを提示する。第3章では、平成28年度にグローバルコモンズで実施された英語ワークショップの概要と参加者について報告する。第4章では、参加者に実施したアンケートおよびヒアリング調査の概要と結果を説明し、第5章で今後の課題について提示する。

2. グローバルコモンズの概要

2.1. グローバルコモンズ設置の背景

平成24年度に採択された日本学術振興会による「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援（旧グローバル人材育成推進事業）」をきっかけに、学内キャンパスにおける学習環境の整備が行われた。まず初めに、平成25年3月に本学図書館ホールを学生の正課・課外活動を支援するアクティブ・ラーニング型学習スペース「Lib. コモンズ」として整備した。続いて、平成25年10月にグループワークやディスカッションなど学生の

[1] 京都産業大学 教育支援研究開発センター グローバル化推進室

正課外学習を支援する「雄飛館ラーニングコモンズ」を福利厚生施設「雄飛館」の2階・3階に設置し、半年間の試行運用期間を経て、平成26年4月より本格的に運用を開始した。本学の全学生を対象に実施された「平成26年度　学生生活実態調査」および「雄飛館ラーニングコモンズ」で試行的に実施された学習支援内容の結果を踏まえ、平成28年4月に学生の正課外における語学学習・異文化理解を支援する「サギタリウス館グローバルコモンズ」がサギタリウス館の1階に設置された。

2.2. グローバルコモンズのコンセプト

本学グローバルコモンズのコンセプトは次の通りである。

「グローバルコモンズは、学生が異文化理解を深め、生きた語学力を身に付け、グローバルマインドを涵養する機会を提供する空間である。グローバルマインドとは、自己と他者の文化の相違を認め、尊重・理解したうえで、コミュニケーションを行おうとする精神のことである。文化の相違を認めるには、相手を知り、自分を知る必要がある。グローバルコモンズは、グローバル人材を育成することを目的としており、体験・実践型の異文化学習、国際交流の機会を提供することによって、自分自身のルーツである自国文化等を振り返るきっかけとさせ、学生のアイデンティティ形成を促していく。」

上記コンセプトに基づき、各エリアの設計がなされた（図1）。

3. 英語ワークショップの概要

3.1. 英語ワークショップのメニュー

本学グローバルコモンズの英語ワークショップは、大学での学びに必要である英語でのプレゼンテーションやライティングなどに関する基礎を学び、授業に役立つスタディ・スキルを習得するための体験型講座である。平成25年10月に運用を開始した「雄飛館ラーニングコモンズ」において、2年間にわたり英語ワークショップを試行的に実施したところ、次の様な傾向が見られた。

実施時間と時期について、開催時間を30分に設定すると内容過多および時間が不十分であった。それに対し90分に設定すると正課と同等となることから、学生にとって負担が重く感じられた。よって30分以上50分未満での設計が望ましいとの結果が得られた。また、異文化理解を目的とする場合は、年中行事や習慣が実施される時期に合わせた計画が必要であり、アカデミック・スキルの習得を目的とする場合は、レポート期日から数週間前に終了する様、計画する必要があることがわかった。

内容について、英文エッセイの場合は、留学・海外の大学院進学希望者を対象とし、論文の構造に焦点をおいた内容と、文法理解および英作文能力の向上に焦点をおいた内容の2種類のワークショップの設計が必要である。プレゼンテーションの場合は、スライドの作成方法など言語に関わらず知識として必要な共通事項については、日本語ワークショップとの合同開催とし、実践練習の

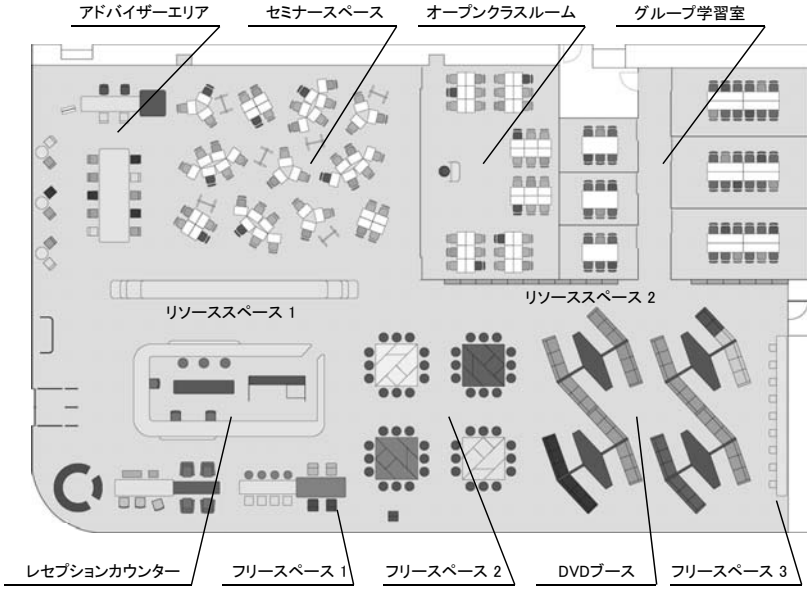

図1. グローバルコモンズ・エリアマップ

表 1.　平成 28 年度　グローバルコモンズ英語ワークショップのメニュー

	1	2	3	4
タイトル	Starting Conversations	Starting Presentations	English Writing	English Speech A to Z
実施期間	①　5 月 - 6 月 ②　11 月 - 12 月	6 月 - 7 月	①　7 月 - 9 月 ②　9 月 - 10 月	10 月 - 11 月
内　　容	各回異なるテーマのもとに日常会話で使われる英語表現を学び、ペア・グループワークを通して英会話を練習する。	3 ～ 5 分の英語プレゼンテーションを想定し、原稿・PowerPoint スライドの作成ポイント、デリバリーの仕方を学んだうえ、英語での発表を練習する。	論理的で説得力のある英語の文章を自力で書くことができる様、英語ライティングの構造を学ぶ。	スピーチ原稿の組み立て方から声の強弱・ジェスチャーの付け方など発表のテクニックを学び、スピーチを練習する。

場を与える必要がある。会話の場合は、留学生を含む学生スタッフによる運営のもと、ゲームを利用するなど、気軽さを強調し、英語を話す機会を与えることを主とした構成が望ましい。異文化理解を目的とする場合は、留学生を含む学生スタッフによる運営のもと、日本を含めた各国の年中行事や季節の習慣について知見を広げるとともに、自国文化への理解を深める内容の設計が必要である。

広報については、学内掲示板による広報に加え、アカデミック・スキルの習得に関するワークショップの場合、留学説明会やプレゼンテーション・レポートが評価課題としてシラバスに記載のある授業に対し、個別にチラシを配布するなど、教員との連携および他部署の協力を得てワークショップの重要性について学生に認知させる必要があることがわかった。

上記試行結果を参考に、平成 28 年度グローバルコモンズ英語ワークショップの設計を行った（表 1）。

3.2.　英語ワークショップの参加者

本学は、経済・経営・法・外国語・文化・理・コンピュータ理工・総合生命科の全 8 学部が 1 つのキャンパスに集う 1 拠点総合大学である。グローバルコモンズで展開される英語ワークショップは、全学部生・大学院生および教職員を対象としており、学部・専攻だけでなく学生・教員・職員の枠を越えた外国語によるコミュニケーションの場を提供している。平成 28 年度の英語ワークショップの学部別参加者[2] の内訳を図 2 に示す。参加者の半数以上は、社会科学系の学部であったが、全 8 学部からの参加があった。

4.　アンケート調査

4.1.　対象

国際交流セミナー履修生である経済学部 2 年次生 15 名とその授業担当教員を対象に、アンケート調査を実施した。国際交流セミナーのシラバス（2016）によると、本セミナーは、英語を専門としない経済学部の 2 年次生を対象とした正課科目である。海外の大学生との交流セミナーを通じて、双方に共通する身近な経済・社会問題について理解を深め、国際的な視野を醸成することを目的としている。授業内容は、経済問題に関する学習の他、海外の大学を訪問して行う交流セミナーにおいて英語でのプレゼンテーション発表や通訳を介

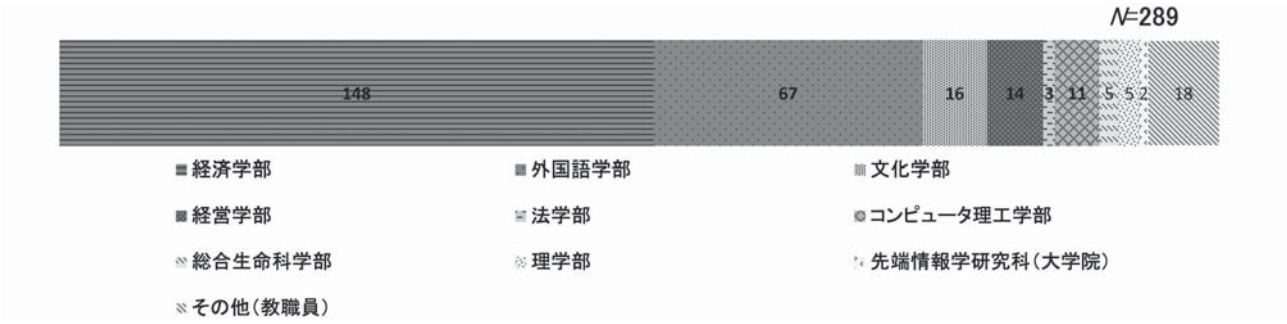

図 2.　英語ワークショップ参加者の内訳

した議論が行われる。

本授業では、「英語でプレゼンテーションができるようになること」を到達目標の１つとしている。

グローバルコモンズ英語ワークショップは、本授業と連携し、学生の正課外における英語学習をサポートした。具体的には、Starting Conversations（表１）を通じて、学生の英語に対する苦手意識を取り除き、Starting Presentations（表１）を通じて、英語での発表の仕方を学び、English Writing（表１）を通じて、英語プレゼンテーション発表のために必要な論理的で説得力のある原稿を作成した。

4.2. 方法

海外研修終了後に、アンケート調査を実施した。質問内容は、主に次の４つから構成されている。

1. スピーキング／アカデミック・スキルに関する質問
2. 正課外ワークショップに対する印象
3. 参加満足度
4. 各ワークショップに関するコメント

1. スピーキング／アカデミック・スキルに関する質問は、1：思わない～５：思う の５段階評価とし、2. 正課外ワークショップに対する印象を尋ねる質問は、該当項目を選択（複数回答可）させる形式とした。 3. 参加満足度は、「はい」、「いいえ」、「どのワークショップに参加すればよいのか、判断できないため、教員から推薦されれば参加したい」のいずれかを選択させる形式とし、4. 各ワークショップに関するコメントは自由記述形式とした。

また、上記アンケート調査に加え、個別のヒアリング調査（２名）を実施した。

4.3. 結果

スピーキングおよびアカデミック・スキルの自己評価を尋ねる設問では、「英語に慣れ親しむことができた」という項目に対し、４を付けた学生が33%（N=5）、5を付けた学生が54%（N=8）であった。「英語をもっと話したいと思うようになった」という項目についても同様の結果であった。また、「英語の勉強の必要性を感じた」という項目に対し、５を付けた学生が80%（N=12）おり、「留学をしたいと思うようになった」という項目については、４を付けた学生が29%（N=4）、５を付けた学生が57%（N=8）いた。上記結果から、全体的に学生の英語に対する前向きな姿勢が読み取れる。

正課外ワークショップの印象を尋ねる設問では、87%（N=13）が「英語を使う機会が増える」を選択している。授業で学んだ英語を授業外における実践の場で「使う」機会が少ないことが伺える。

参加満足度について、「今後この様なワークショップに参加したいと思うか」という設問に対し、73%（N=11）が「はい」と回答しており、参加者のワークショップに対する満足度は高いと言える。一方、「いいえ」と回答した学生はいなかったものの27%（N=4）が「どのワークショップに参加すればよいのか、判断できないため、教員から推薦されれば参加したい」と答えており、ワークショップを自ら選択することが難しいと感じている学生がいることがわかった。

5. 今後の課題

本学の全学生を対象に実施された「学生生活実態調査」（2014）によると、「英語力をつけたい、または高めたいと思うか」という設問に対し、回答766件中、84.2％（N=645）が「はい」と回答しており、本学学生が英語力の低さを実感し、レベルを上げたいと感じていることがわかる。

また、「どのようにすれば、英語学習をしたい意欲や動機を継続、または高められると思うか」という設問に対しては、回答629件中、42.3%（N=266）が「通信教育等、自分の空いている時間をうまく活用する仕組みがあればできると思う」と答えており、35.6%（N=224）が「一緒に学習する仲間がいれば維持できると思う」と回答している。また、14%（N=88）が「勉強の仕方や困った時に相談できる窓口があれば維持できると思う」と回答しており、正課外における英語学習支援環境の強化が課題となっている。

6. まとめ

学生は、教員の推薦がなければ、自分に適したワークショップを取捨選択することが難しいと感じている。教員と学習支援員が連携し、学生が授業での学びに必要とするアカデミック・スキルを身に付けることができるワークショップを設計することが必要不可欠である。

謝辞

本稿作成において、貴重なデータを提供してく

ださった西村佳子経済学部教授と齊藤健太郎経済学部教授ならびに国際交流セミナー履修学生に心より感謝申し上げます。

注

１）留学生を含む学生スタッフは担当していない。

２）Starting Conversations ②（11 月～ 12 月）は含まない。

参考文献

大学設置基準　（1956）　第 1 章 第 21 条 http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/idxselect.cgi?IDX_OPT=4&H_NAME=&H_NAME_YOMI=%82%A0&H_NO_GENGO=H&H_NO_YEAR=&H_NO_TYPE=2&H_NO_NO=&H_FILE_NAME=S31F03501000028&H_RYAKU=1&H_CTG=26&H_YOMI_GUN=1&H_CTG_GUN=1（2016 年 12 月 14 日閲覧）

京都産業大学学長室・学生部　（2015）　平成 26 年度学生生活実態調査報告書, pp.18, 137-138

京都産業大学学長室グローバル化推進室（2016）平成 26 - 27 年度　日本語／英語ワークショップ実施報告書, pp.44-45

京都産業大学シラバス　（2016）国際交流セミナー https://syllabus.kyoto-su.ac.jp/syllabus/html/2016/771.html（2016 年 12 月 14 日閲覧）

千葉美保子（2016）主体的な学びを促進するための学習支援構築に向けて　－学生へのヒアリング調査から－．高等教育フォーラム 6：pp.97-102

文部科学省中央教育審議会（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて ～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）資料編: p58 http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm（2016 年 12 月 14 日閲覧）

KSU Students' Learning Outside the Classroom through Global Commons English Workshops

Ryoko OZAKI[1]

Kyoto Sangyo University established a new facility called the Global Commons in April 2016, a learning center for language acquisition and understanding cultural diversity.

Since then, three learning supporters (fixed-term staff) and part-time student staff, including students from overseas, have been providing language learning support such as 1. Experienced-based activities, which give students an opportunity to use English, focusing mainly on listening and speaking, through cultural events. 2. English workshops, which give students basic study skills in making English presentations and in writing. 3. An individual learning session, which gives students advice on solving their problems regarding their English learning.

This report introduces the Global Commons facility and illustrates the workshops held there. It also shows the results of surveys on the workshops, held during the 2016 academic year in collaboration with the faculty of Economics, outlining Kyoto Sangyo University student perceived needs outside the classroom for learning English.

KEYWORDS: Extracurricular activity, Study skill, Learning support, English workshop, Global Commons

2017 年 1 月 16 日受理

1 University Internationalization Project, Center for Research and Development for Educational Support, Kyoto Sangyo University